
ラッセルカ

そらみみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラッセル力

【NNコード】

N9448C

【作者名】

そらみみ

【あらすじ】

ラッセル力はひとりです。でもひとりとは感じていません。ひとりつて事を孤独つて事をしりません。出会いがなければ気づかないかもしません。

「ラッセルカはおんなのこ」

長い黒髪

金の瞳

ラッセルカはひとりが好き

部屋の中で

本をあれば

ひとりで生きていける

誰ともはなさず

誰とも会わず

悩むことも 傷つくることもなく

ラッセルカのおひばりは森の中

小鳥のさえずり

川の音

全部が完結しているよつて

まったくもつて

なにかが欠けてるよつて

今日は森をおさんぽ

そして出会つた

見知らぬだれか

これから始まる

そんなおはなし

ラッセルカはひとりが好きです
誰かと会うなんて事は週に一度

作ったレースを村の生地屋さんにかつてもらこ

新しい材料や食べ物を買うために森を出るとさくらいです

昔は生地屋さんもいろいろ話しかけてくれた気もするのですが

ラッセルカがあんまり無口なもので今ではもう話しかけてはくれません

始終そんな感じですから

ラッセルカには親しい友達がいません

でも

今までずっと そうでしたから
それがラッセルカの普通でした

ラッセルカはおさんぽが好きです

本で読んだことを 頭の中でぐるぐる考えながら

鳥の声や 水の音

ちょっと涼しい風の中を

歩いていくことが好きでした

それが全てでした

そこにいるようで

まるでいないような

そんな毎日でした

今日もラッセルカはひとりで森を歩いています
さつきまで読んでいた本のことを考え考え

頭の中の世界でひとりで遊んでいました

あまりに頭の中の世界に浸っていましたから
その人じぶつかるまでまったく気がつきませんでした

「？」

なにが起きたのか しばらく把握できません
相手の人も驚いているようです

「君はいつたといつからそこについたの？」

少年から青年へとうつろつていいく年頃でしうか
おどおどした態度が 幼さをいつそう際だたせる
色白の青年でした

「・・・」

突然の事と はじめて見る人
ラッセルカは言葉がでません

「（）めんなさい 誰がいるのにきづかなかつたんだ
まるで突然 森の中から現れたみたいだつたんだ」

青年はじどりもどりになりながら 謝ります
ラッセルカもよひやく言葉がでてきます

「おさんぽをしていたの」

やつとそれだけ言えました
でも

その後に なんと黙つていて いかがまるで言葉が浮かんでもあせん
何も言えずに黙つていると

「怒つてこぬのかい?」

青年がおずおずと聞いてきました
青年も おしゃべりは 決して得意ではないよつです
何処か遠くを見るような まるで直接話しかけるのは いけないこ
とだと

そう思つてこるよつな話し方です
それでもラッセルカが困つてだまつていると
青年もまた 黙つてしましました

そして青年は そのままなんだか 怒られたよつな
そしてちょっと寂しそうな そんな顔をして
歩いていってしまいました

なんだかラッセルカは 悪いことをしたよつな気がしました
今までそうでした
誰とでもやつでした
ほんのちよつと この居心地の悪い感情
ラッセルカはまた 考えるのをやめて
頭の中の世界に 沈んでいました

次の日

今日もラッセルカはおさんぽをしています
昨日 あの青年とぶつかつたあたりにさしかかります

「あ」

昨日の青年がいました

なんだか ラッセル力に 気づいているのに
わざと知らんぷりをしているような そんな風に
朽ちて 折れてしまつた木の幹に座っています

昨日感じた あの ちょっといたたまれないような感情が
またラッセル力に生まれます
そのまま気づかないふりで 通り過ぎようとラッセル力が思つてい
ると

「昨日はぶつかつてしまつて 驚かせてしまつて 「ごめんなさい
まだ 怒つているだろ?」

なんだか へんな話し方で 青年が声をかけてきました
ラッセル力は 別に怒つてなんかいませんでした
ただちょっと 突然だつたので どうしていいかわからなかつただ
けでした

「僕 人と話すことが 苦手なんだ はじめてのひとが 怖いんだ
それで 昨日は ちゃんと謝れず逃げてしまつた 「ごめんなさい」

なんだか青年は謝つてばかりです
ラッセル力は困つてしまつました 怒つてなんかいませんし
なにより 自分の方が いけないこととしたと そう思つていたか
らです

ラッセル力はゆっくりと 考え考え やつと

「怒つてなんか いないわ」

それだけ言いました

なんだか たどたどしくはありますが お互に はじめて 会話をしました

「本当に 怒つてないのかい？今僕は 変なことを言つてはいけないかい？」

青年はやつぱり 昨日と同じ なんだか遠くを見ているようになきよろきよろしながら

話していましたが なんだかちょっと 嬉しそうでした

「いいえ 変なことは言つていないわ それに本当に怒つてなんかいないわ 私こそ「めんなさい 私も人と話すつて事に 慣れてないの」

ラッセルカも 自分の無口が 相手を怒らせてしまつことがありましたので なんだか この ゆっくりな 手探りな会話が すこし 楽しくもありました

「僕はターマイロ もしよければ 本当に もしよければ 貴方の名前を教えてもらえないだろうか？」

ラッセルカは初めて相手の名前 自分の名前というものを 意識しました

そうです 他者が存在しないのに 今まで名前なんてものに なんの意味があつたでしょう

自分はラッセルカ それさえも あまり重要ではなかつたのです

「私は ラッセルカ」

なんだか 久しぶりに 自分はラッセルカだと セつ思いました

「はじめまして ラッセルカ ああ はじめましてじゃないか ラッセルカ じんにちわ」

おどおどと 半ば逃げそうになりながらも ターマイロは一生懸命話してこます

「貴方が突然森の中から現れて そしてあまりに消え入りそうだったから 森の精靈にでも 会つたんじゃないかなって 昨日あの後 ずっと考えてたんだ」

そして少し恥ずかしそうに

「・・・それにあんまりその瞳が綺麗だつたから ますます精靈だつたのかなって

その・・・今日は確かめに来たんだ」

ラッセルカの瞳は金色でした 夕方の 森の木々から漏れてくるようないい金色でした

「私は精靈じゃないわ この森でひとりで暮らしているの」

ターマイロが言こます

「ここな森の奥で一人で寂しくはないの?」

ラッセルカはまた困ってしまいました

寂しいって何だろう？今までずっとひとりでした
本さえあればよかつたし 本だけが全てでした
それで 聞いてみました

「寂しい？寂しいってどういう事かしら？私は今までずっとひとり
これっておかしいことなのかしら」

ターマイロも考え考え

「おかしいって事はないけれど・・・どうなんだろ？？そう言わ
れると僕もよくわからなくなってくるね
でも僕はひとりでいると 寂しいって感じちゃうんだ

そしてターマイロは いろいろ考えすぎてしまって 他人と話すの
が怖いこと

だから親しい友達が誰もいないこと 寂しい 一緒に物を観て 一
緒の感想を持ちたいことなどをラッセルカに話して聞かせました

ラッセルカはこんなに他人と会話をしたのは初めてでした
ターマイロはラッセルカが何も言わなくても不機嫌になります
そのかわり 始終ラッセルカが怒つてないかどうか確かめますが
真剣にラッセルカに話しかけます

いろいろなターマイロの思いを聞いているうちに ラッセルカは
まるで 本を読んでいるみたい とそう思いました

「ターマイロ 貴方の中にはいろいろな物語がつまっているのね
私ね 今ね 楽しいわ」

ターマイロはびっくりした顔をして そして嬉しそうに言いました

「僕の話が楽しい？本当に？ 初めて言られたよそんなこと」

そしてそれからじょらくの間 ターマイロは自分が考えていること
をいろいろラッセルカに話して聞かせました
その間 ラッセルカが口を開くことはありませんでしたが とても
ラッセルカも ターマイロも楽しそうでした

「それじゃ 僕 もう帰らなきゃ」

気がつくとあたりは薄闇に包まれています
ラッセルカの心になにか おかしな感情が生まれます
ただ単に悲しいわけじゃなく なんだかわからない気持ちです
でも
こんな時 なんと言えばいいのかわからないので やっぱりラッセ
ルカは黙っていました

「また 会いに来てもいいだろ？」

ターマイロの言葉を聞いたときも なんだかわからなくなってしま
つて ただ ロクンと うなづくだけでした

次の日もラッセルカの日常は変わりません
本を読むことと おさんぽ それだけです
ただ おさんぽの途中で ターマイロが座っていた朽ちた木の幹で
本を読む
そんなりょっとした変化はありましたが

幾日かが過ぎていきました
ターマイロはやってきません

ラッセルカは今までのよつに 考えるのをやめようかと思いましたが
何故でしょうか やめようやめようと思いながら ターマイロの事を
を考えてしまうのです

自分にいろいろ話をしてくれた ターマイロの一言一言が思い出せ
ます

なにかが足りないと 思いました

それまで 感じていた森と 今のこの森 一緒にばずなのに

川の音や 鳥の声

あの人にはどんな風に見えるのだろう

そして

あの人には 私はどんな風に見えるのだろう
その答えはこの森のどこにもありません
答えを持つているのは ターマイロだけです

今のこの森は いえ ラッセルカ自分自身は 欠けています
ラッセルカはそう 感じてしまいました

「寂しい」

声に出して言つてみました

「寂しい」

ラッセルカは 寂しくなつてしましました

こんな事ならば

今まで通りに

ひとりがよかつたとか

そんなことを考えていましたが、すこしづかりこの孤独は、気持ちよくもありました

夜に泣きました。何故今までこんなひとりの夜を過ごしてきましたのでしょう

朝がきました。森のいろんなことが、そこにありました。ラッセルカははじめて、せかいの存在感を感じました。

世界は、森は、ややしく、そして、つめたく、ただ、存在していました。自分が、全てではありませんでした。

朽ちた木の幹を田指しました

川の音や、鳥の声、木漏れ日や、風の音、流れる雲や、陽の光

それら全てが、ラッセルカに、突き放す冷たさと、包み込む暖かさ

両方をこっぴんに、くれました

「ひやしづつ」

ターマイロが座っていました。嬉しい気持ちが、あふれます

そしてまた、いろいろ話しました

初めて出合った日、ターマイロは、この世界から消えようと、森にいたことや

ただ誰かに会いたって事やほんのちよつと認めてもいいこと

それだけで生きていこうとがんばれること

そんなところなのだと話を始めた

「またがんばらつゝて そひ思つて やつ直せり」と元気を貰つて
君に会いに来たんだ」

ラッセルカはターマイロとの ターマイロはラッセルカとの そして一人とも森や 世界との そし

繫がりを感じました

今日もラッセルさんは本を読んでいます

「おれは今、」

ターマイロが手を差し伸べます

「おれがおもつてやう」

読んでいた本を置き 笑顔を向け ラッセルカがその手をとります

森はもう 欠けてはいませんでした

(後書き)

習作なので何か感想をいただけると幸いです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9448c/>

ラッセルカ

2010年10月25日02時29分発行